

【論文】

成瀬正一の道程（一） 松方コレクションとのかかわり

関口安義

東京上野の国立西洋美術館には、松方コレクションと呼ばれる西洋の絵画・彫刻・工芸品、特にフランス印象派の絵画とロダンの彫刻で知られた美術収集品がある。実業家の松方幸次郎が大正後期から昭和初期にかけて収集したものとされている。

この松方コレクションは、すぐれた美術鑑賞眼を持つ成瀬正一の協力のもとになったことは、意外と知られていない。国立西洋美術館は開館当初こそ松方コレクションが成瀬正一の助力で形成されたことを小さく報じていたものの、一九九八（平成一〇）年秋の改築後は、そのいわれを記した案内板も消え、『国立西洋美術館名作選』という立派なカタログの高階秀爾の「序文」にも、成瀬正一の名はない。

本論では、芥川龍之介の友人成瀬正一の松方コレクションとのかかわりを中心に、同時代青年の文学と美術への関心に光を当てることとする。本論もわたしの芥川研究の一環である。
キーワード：国立西洋美術館 松方幸次郎 矢代幸雄 クロード・モネ マルモッタン美術館

はじめに

ここ数年、芥川龍之介や成瀬正一ら一九一〇（明治四三）年一高入学組の、一高時代の日記が次々に出現して研究を活性化させている。その最大の目玉は、芥川の親友井川恭（のち恒藤恭）の一高時代の日記「向

陵記」である。これは『向陵記 恒藤恭一高時代の日記』⁽¹⁾として、恒藤記念室のある大阪市立大学より刊行されている。また、井川恭と親しかった森田浩一の日記は、『森田浩一とその時代 日記を通して見えてくるもの』⁽²⁾として福生市郷土資料室より影印で刊行さ

れた。さらに長崎太郎や松岡譲らの日記の発見もあった。成瀬自身の日記（「成瀬日記」と命名した）も一九二（平成四）年に、「遺族が保管していることが判明し、わたしはいち早く、その恩恵に浴した。「成瀬日記」は、その後高松市の菊池寛記念館が収蔵することになり、現在石岡久子の手で翻刻が進行中である。

これらの日記から言えることは、彼らが絵画、特に水彩画による写生と深くかかわっていたことだ。絵を描くという行為は、彼らにとって日常そのものであった。森田浩一の日記（「浩一日記」と福生市郷土資料室が命名）には、彼が大下藤次郎と丸山晚霞が設立した「日本水彩画会研究所」に通い、指導を受けたことや、高時代井川恭と郊外のスケッチに、しばしば行動を共にしたことを証す。二人は一九二（明治四四）年十一月二日から五日まで、森田の故郷熊川村へ写生旅行までしている。その詳しい記録を、森田浩一とその時代 日記を通して見えてくるもの』に見ることができ。なお、この影印復刻版の解説（峰岸秀雄執筆）によると、井川恭と森田浩一は、一年間に二十六回ものスケッチに同行しているという。井川恭はまた長崎

太郎（後年京都市立美術大学学長）とも、しばしば写生に出かけている。

芥川龍之介には、中学時代に描いた「家」や「ちやぼ」の水彩画をはじめ、絵の添えられた多くのがきや書簡のあることが知られ、井川恭も宍道湖や赤城山を題材とした絵やスケッチ・ブックを多数残している。二〇〇四（平成一六）年十月、大阪市立大学学術情報総合センターの研究者交流室に展示された水彩画約六十点は、まさに目を見張らせるものがあつた。大阪市立近代美術館建設準備室の熊田司によると、井川恭の水彩画には、大下藤次郎の水彩画普及運動とかかわりがあり、井川は松江水彩画講習会などにも出席していたという。井川恭は中学時代から水彩画をしきりに描いていたのである。

久米正雄も松岡譲も、そして先の理科の森田浩一も、若き日には絵をせつせと描いていた。芥川の漱石宛書簡（大正五年八月二八日付）の一節には、「画は、新思潮社同人中で、久米が一番早くはじめました。何でも大下藤次郎氏が三宅克己氏の弟子か何かになつたのかも知れませんが、とにかく、セザンヌの孫弟子位には、

かけるさうです。同人の中には、また松岡も画をかき
ます」とある。けれども彼らは皆、その鑑識眼が高く
なるに従い、絵筆を投げ捨てている。芥川龍之介のよ
うに、河童の絵に情熱を燃やすケースはあつたものの、
多くは年齢を重ねるとともに絵から離れていく。成瀬
正一もそうした例からはずれるものではなかつた。

が、若き日絵筆をにぎつたということは、彼らの絵
画鑑賞力に資するものがあつたようである。彼らの中
からは、やがてここで論じる松方コレクション陰の生
みの親成瀬正一や、ウィリアム・ブレイクの銅版画や
研究書を多数収集し、ブレイクの「隠れたる愛蔵家」
とされ、京都市立美術大学（現、京都市立芸術大学）の
学長となる長崎太郎のような人物が出るのである。

一 日本の文壇への失望

成瀬正一は一九一九（大正八）年一月七日、二年半
の欧米留学を終え帰国する。成瀬としては、第一次世
界大戦後のパリにとどまり、いましばらく自由に勉強
したいという願いを持っていた。一九一八（大正七）
年四月十九日付で、パリから日本の松岡譲宛てに出し

た手紙がある。そこでは「シャンゼリゼエ（Champs
Elysee）やPlace de Foliieなんぞを歩いてみると若葉
の下を女が三々伍々歩いてゐるし、周囲に心地よい建
物があつて本当にいい。私は時々BalzacやHugoの銅
像がある所へ散歩に行く。日本へなぞかへりたくない。
併しParisでない私にとつてやはり日本にかへるのが
運命であらう」と書いている。ともかく彼は、父成
瀬正恭のたつての要請があつて、一時帰国のつもりで
日本に戻つたのである。母峰子の墓参、それに結婚問
題があつた。彼は近く二十七歳になろうとしていた。

帰国後の彼は、一時ジャーナリズムにもてはやされ
た。アメリカから第一次世界大戦最中のフランスへ。
続いてロマン・ロランを訪ねてレマン湖畔のヴェルヌ
ーヴへ行き、世界平和の問題を論じる。休戦の時はパ
リにいて、人々の様子を見て帰国した最初の人といふ
ことで話題性があり、もてはやされたのである。一九
一九（大正八）年一月九日（八日夕刊）付『時事新報』
は、「休戦調印当時の巴里を見て」という成瀬の談話
を載せている。要旨は戦争中でもパリの人々は冷静さ
を發揮し、騒ぐことがなかつた。調印の日も市民はお

互いに、「おめでとつ。おめでとつ」というばかりで騒ぎ回らなかつた。酒を飲んで騒いでいたのは、英国兵や米国兵である。当日の夜、前夜までまっくらだったバリが、一時に灯火を点じたので、街は見違えるばかりとなった、というものである。

新聞雑誌からの原稿依頼も相次ぎ、「ロオランとの三週間」(『時事新報』一九一九・一・一〇〜一二)や「瑞西の旅」(『中央公論』一九一九・四)、「旅日記二三」(『読売新聞』一九一九・四・六)、「或夏の午後 ロオランとの一日」(『新潮』一九一九・五)、それに「象牙島田」(『雄弁』一九一九・五)のような小説も書かれた。

ところで、帰国した成瀬正一には、結婚問題が持ち上がっていた。相手は川崎造船所の副社長川崎芳太郎の長女、福子である。福子は二八九八(明治三一)年十一月九日の生まれで、当時二十歳、正一の七歳年下であった。神戸の市立山手小学校を出、県立神戸第一高等女学校を卒業、お茶やお花、ピアノなどの花嫁修業に励んでいた。二人は相手の顔も知らずに結婚したという。このようなケースは当時はよくあったことで、そういえば一高時代の友人長崎太郎も、大久保美和と

の結婚に際し、「一度も見もしないで嫁にもらいました」という。それでも周囲が当事者二人の特徴や性格を十分調査のうえでで紹介なので、うまくいったのである。

川崎福子はよい教育を受けており、財閥の娘としておごり高ぶるところもない、慎ましやかな少女であった。しかも、なかなかの美人である。わたしはご遺族の村上光子さん(成瀬夫婦の長女)から、二十代半ばの福子の写真二葉を見せてもらった。一葉はパリ郊外ジベルニーのクロード・モネの家で撮ったもの。モネとその家族と撮った写真の福子は、実に美しい。背は高く、鼻筋が通り、白い歯が印象的である。まさに明眸皓齒の美人なのである。もう一葉はパリで撮影した家族との記念写真で、こちらの福子は落ち着いた知性的美人に見える。その上彼女は性格が明るかった。正一は福子が気に入ったのである。

村上光子『わが父 わが母』によれば、福子は「人をそらさぬ気さくさと、交際の広さ」をもった女性であったという。それは教育の賜物であると同時に、正一と結婚し、若き日、海外で過ごした体験にもよるの

であろう。彼女は夫正一没後もずっと健康を保ち、一九八二（昭和五七）年七月十三日に奈良の地で八十三歳九か月の生涯を終えた。わたしは亡くなる数年前の一九七六（昭和五一）年三月八日、奈良に福子未亡人を訪れ、正一の第二の洋行の際の様子を何かと伺うことができた。当時七十代後半であったとはいえ、福子は背筋をしゃんと伸ばし、声にはつやがあり、応対にはつばを心得、往時の美人の面影をとどめていた。

成瀬正一と川崎福子との結婚式は、一九一九（大正八）年二月五日日比谷大神宮で行われ、式後披露宴が帝国ホテルで行われた。帰朝後一か月も経ていない。二人の結婚は、当時華族銀行といわれた十五銀行頭取成瀬正恭の長男と、関西財閥の雄、川崎造船所副社長川崎芳太郎の長女との結婚ということで、マスコミの関心を集めた。結婚翌日、二月六日の『読売新聞』（「よみうり婦人附録」）は、福子の花嫁姿の写真入りで二人の結婚を報道している。この結婚は、いわば一種の政略結婚⁷であり、東西財閥の結合を強めるためのものであった。正一はニューヨーク滞在中から、自分の信じる道は断固として行く、その代償として妻を貰う

ときは、両親の好きなようにさせる、自分は口をはさまない、と松岡譲宛書簡にしばしば書いていたが、その結婚は、まさにその通りのものとなった。

結婚した成瀬正一は、文筆に没頭しよつと思つた。彼はフランスのリヨンから松岡譲に宛てた便りの一節に、「私は日本にかへつたら、日本の本当のArtをReviveさせるやうなmovementを起したく思ふ。西洋のRealism,Intellectualismの鍛錬を経た後の本当の日本のArtをつくりたく思ふ」（一九一八・六・二八付）と書き、帰朝後の抱負を語っていた。が、二年半という短い外遊期間とはいえ、その間日本の文壇は、大きく変わっていた。成瀬が師と仰いだ漱石はすでに亡く、文壇は自然主義の流れを汲む私小説が全盛を誇るといふ状況である。友人では漱石令嬢筆子と結婚して沈黙した松岡譲を除き、芥川龍之介を筆頭に、久米正雄も菊池寛も、この年には売れっ子作家となっていた。成瀬の結婚翌年一九二〇（大正九）年一月号の『文章俱樂部』の「文壇鳥瞰図」は、第四次『新思潮』出身作家をとりあげ、「一口評をすれば芥川氏は巧難、久米氏は縦横、菊池氏は質実とでもいほか。成瀬氏は外遊

以後多く書かず、松岡氏は漱石山房に奎して未だ世に出でない」と書くが、それが世間一般の見方であった。そうした時に生じた江口渙の感情的な成瀬正一批判は、成瀬に日本の文壇との訣別を決意させるものとなる。江口の成瀬批判とは、すでに小著『評伝成瀬正一』³にくわしく記したので、ここでは概略を記すにとどめる。事は雑誌『新潮』一九一九（大正八）年九月号のアンケート「文壇四十七家の都下新聞同盟休刊に対する感想」に成瀬が寄せた回答文に、江口渙が猛反発するという形で行われた。

東京の新聞印刷工組合（革新会）は、この年六月に結成され、七月三十日八時間二部制、最低賃金七十円の統一要求の下、一部がストライキに入り、三十一日新聞社主連盟が革新会との交渉を拒否したので、ストは拡大し、八月一日には十六社が新聞休刊を発表、警視總監調停の結果革新会は解散し、八月四日に至ってようやく解決した。

『新潮』が早速この問題への感想を諸家に問うたのは、事が社会の公器ともいえる新聞の休刊という大問題を含んでいたからである。成瀬の回答文は、「休刊

それ自身は、此頃盛に起る同盟罷業と同じものと考えます。併し、休むだ新聞が毎日吾々の生活と密接な關係を持つてゐるため、特に、問題になつてゐる労働問題に就て考へさせられました」ではじまり、「私のやうな門外漢にも現在の資本及び労働制が相手の弱味につけ込むで、或は過激と云つてもいいやうな傾向を執るやうに思はれます。更に詳しく申上げれば、欠点を嬌めやうとする社会一般の努力の傾向があまり物質的過激だと思ひます。ノつまり休刊によつて私は頃日頭を擡げ始めた危険な傾向を一段と深く感じました」と続く。

いかにもリベラリスト成瀬正一らしい生真面目な見解である。ヨーロッパから帰国したばかりの成瀬正一には、日本の「社会一般の努力の傾向があまり物質的過激的」と映つたのである。ところが、『新潮』翌月号に江口渙は、「何が過激だ 成瀬正一君の愚論」と題した文章を載せ、成瀬のこの短い感想を「何と云ふ驚く可き愚論であらう」とこきおろすのであった。

江口渙は一八八七（明治二〇）年七月二十日の生まれなので、成瀬より五歳年上ということになる。芥川

や久米正雄とは、漱石門の同輩として交わりがあった。江口の『新思潮』勃興時代のこと⁽⁹⁾には、はじめ成瀬と会ったのが、成瀬の帰朝祝賀会⁽¹⁰⁾であったとされ、「その時の印象は、不幸にしてあまり好いものではなかつた。それは成瀬君の顔が芸術家と云ふよりも、むしろ遙かに商人と云ふ感じを与へたからだ。／＼その後、私は、「このブルジョアよ。叩き殺すぞ」とでも云ふ様な感じの激烈極る一文を『新思潮』誌上で叩きつけて以来、もう数年成瀬君と会つた事がない」とある。江口渙はどちらかというと、偏執性をもつ人物であつた。正直さゆえの一本気が善悪どちらかに人間を分け、愛憎で裁くのである。それが彼の人生を、波乱に富んだものにしたとも言えよう。彼のそうした性格は、多くの文壇人が証言する。例えば芥川龍之介は「陰影に富んだ性格 江口渙氏の印象⁽¹¹⁾」で、「愛憎の動き方なぞも、一本気な所はあるが、その上にまた殆病的な執拗さが潜んでいる」と的確に批評する。右の「何が過激だ 成瀬正一君の愚論」では、日夏耿之介と成瀬正一を槍玉にあげるが、日夏の感想に対しては、「愚論以上の愚論、低能的愚論であつて、寧ろ論者自身の頭の悪

さを自ら証明したものに過ぎない」とまで言う。アンケートに気楽に応えた方では、これではたまらない。江口の生一本の単細胞的性格は、まま、このようなかたちで暴発するのであつた。

ロマン・ランと世界平和について論じてきた成瀬正一には、二年前のロシア革命や民族紛争の悲劇が映つていたに違いない。それは同じアンケートに応えた白鳥省吾なども指摘しているところだ。白鳥省吾は「印刷物の値上！ 労働者万能！ それが精神生活をする者を無視する露国の過激派を学ばないことを望む」と言っている。

江口渙の『新思潮』勃興時代のこと⁽¹²⁾をよく読むと、江口は成瀬をその人柄や作品で判断するというよりも、初対面の印象でとらえていることに気づく。「成瀬君の顔が芸術家といふよりも、むしろ遙かに商人と云ふ感じを与へた」などという感想が、よくそのことを物語っている。そういうえわたしは晩年の江口渙の講演を、浦和（現、さいたま市）の労働会館で聴いたことがある。背が高く、眼光鋭い短髪の老人江口渙は、芥川龍之介の思い出を語つたが、なつかしげ

に淡々としゃべっていたのを覚えていた。

ロマン・ロランは成瀬正一の印象を、「たいそう感じのいい、知的な人」（ヘルマン・ヘッセ宛、一九一八・七・二五付）、「知的で感じのいい、自由な、誠実な青年」（ジャン・ド・サン・プリ宛、一九一八・八・二五付）と、とらえたが、江口には、そうした好印象などまったくなく、このブルジョア息子め、といった先入観が先走っている。芥川や久米などに誘われ、しぶしぶ出席した帰朝祝賀会での成瀬のさつそうとした姿と、その後のジャーナリズムでもてもてぶりが、気に入らなかつたのかも知れない。さらに十五銀行頭取の息子という成瀬の位置への反発もあつて、「何が過激だ 成瀬正一君の愚論」が書かれたとしてよいだろう。

江口の眼にはリベラリスト成瀬正一は映らず、親の金で外国に行った新帰朝者が意識され、このブルジョアよ何を言うか、という低俗な対抗心から「激烈極る一文」を書いたのである。それゆえに次のような説教めいた言説が続く。

若し成瀬君にして労働者の現在の要求が過激で

あると云ふならば、私は更に云ひたい。今まで資本家が労働者の弱味につけ込んで飽くまで不当な富をむさぼつてみた態度と、現今労働者が自己を正当に生かすための費用の最低額を保証する態度と果してどちらが過激であるか。資本家が労働者に対して用ゐた過激な態度に比して、今の労働者の資本家に対する態度は、千分の一、万分の一ほどにも過激ではない。否、過激でもなければ、激でもない、むしろ、見てみて齒掻ゆい位穩健なものに向つて、極めて漫然と過激呼びりをしてゐる。これ疑もなく成瀬君が現在の悪徳資本家と同程度に、少くとも旧思想家と同程度に、正しく批判力と理解力を欠いてゐる疎脳悪頭の所有者である事の、何よりの立派な証拠ではあるまいか。

この見解は、正当論を装いながら、リベラリストを悪徳資本家、旧思想家にねじまげていると言えようか。成瀬は当時アメリカからヨーロッパを巡り、二年半の旅から帰国して時を経ず、新聞休刊という事件の感想には、外国の事情も踏まえられ、むしろ聞くべき

ものさえ含んでいた。が、江口は一刀両断に成瀬正一を「退治」しようとしたかのようである。

江口は決して人の悪い人間ではない。佐藤春夫に言わせれば、「甚だ義理堅い」、「俠氣」をもつ人物なのである。ただ芥川龍之介の言うように、一本気で、執拗なところがあつた。成瀬との友人つき合いは薄く、その純情なやわらかな心にもふれたことがなかつたろう。初対面の印象がよくなく、顔が芸術家というより商人という感じを与えたというので、揚げ足を取つたということなのか。江口の成瀬批判は続く。

更に成瀬君は云ふ、「欠点を矯めやうとする社会一般の努力の傾向があまり物質的過激的だと思ひます」と。

然しかくまでも社会人生を物質化したのは、果して何人の罪であるか。欠点を矯めやうとする「覚醒した労働者並びに知識階級」の人々よりも、欠点を矯めまいと努力する悪徳資本家並びに不良政治家の方が、社会人生の物質化に対して何百倍、何千倍の罪がある。そして、その罪惡に依つて勞

働者は絶えず物質的に極めて不当な待遇を受けてゐる。それに対して労働者が自己をまず物質的に救はんとするのは当然である。否、当然すぎるほどに当然である。然るに、成瀬君は労働者の当然極るほど当然な、最少限度以下の要求に対してすら、尚かつ「あまりに物質的、過激的である」と云ふやうな、漫然たる非難を加へてゐる。

一体、成瀬君は何に依つて漫然過激呼ばりをするのであるか。激に過ぎるとは何を云ふのか。何が果して激なのか。最少限度の要求を過激であるとか云ふならば、一体何の程度の要求が穩当なのか。旧の如く悪徳資本家の利己心の犠牲となつて、その残忍な蹂躪に身を播かせて委せてゐる事を、穩当とでも云ふのであるか。私は不幸にして過激であると云ふ同君の言葉の、真意が果して何処にあるかを知るに苦しむ。

この新聞争議は、横山勝太郎という憲政党所屬の代議士を労働者側がかつぎだしたものの、結局腰くだけに終わった。同じアンケートに依つて堺利彦は、「勞

働者が横山勝太郎などいふ人物をかつぐ事の有害無益が明白に立証されたのを愉快に思ふ」と言い、また小川未明は、「今日の形勢から見て、今度の罷工は同情し兼ねるものがある。独り労働問題のみならず、食料問題の危急を告げつゝある今日、唯一の味方たるべき戦闘機関を停止したのは誤りであつたらう」とまで言っている。そうした中で江口の成瀬批判だけに、その偏執さのみ目立つのである。先に引いた芥川龍之介の江口評にも、成瀬へのこの異常な攻撃が意識されていたのであろう。

江口は成瀬批判の文章の最後を、「若し成瀬君にして、この驚く可き愚見を永久に捨てない限り、或は将来に於いて階級戦が驚く可き高潮に達した時、私と成瀬君とは遂に純然たる敵味方となつて、相戦わなければならぬかも知れない」と大仰なこぼれで結ぶ。ヒューマニストで、ロマン・ロランと対等に世界平和や人類の未来を論じた成瀬正一を敵よばわりしたところに、当時の日本の文壇、ひいては左翼陣営の精神的貧困があったと言わねばならぬ。

アメリカやヨーロッパで学んだ「Intellectualismの

鍛練」を生かし、日本の文学を再生しようと意気込んでいた成瀬は、日本のサークル的文壇の保守性につまづくことになる。帰国、結婚後も彼はかつての新思潮同人と律義に付き合っていた。特に芥川龍之介とは、この年六月十六日夜、有楽座へチェーホフの「伯父ワニヤ」を観に行つたり、九月二十四日には、久米正雄も交え三人で、大学時代からの友でロイター通信社の上海特派員として赴任するジョーンズのため、送別会を鷗谷の茶屋伊香保で開いたりしている。ついでながら、成瀬正一がジョーンズを訪ねて中国旅行をするのは、一九二〇（大正九）年三月末から四月にかけてであった。芥川が大阪毎日新聞社の特派員として中国を訪れる一年前のことである。

日本の文壇に仲間入りしようと、新帰朝者の成瀬正一は、それなりの努力もしたようである。が、江口渙の『新潮』に載つた一文「何が過激か 成瀬正一君の愚論」は、成瀬の出鼻をくじくことになる。アメリカやヨーロッパにいたころ、夢にまで見た日本の文壇で活躍するという希望は、一気に冷めてしまう。つまらぬ失恋小説やテーマ小説が大手を振ってまかり通り、力

のある者は沈黙し、新帰朝者は疎外される。軽い気持ちでアンケートに返答すると、揚げ足を取られ、「愚論」などと騒ぎ立てられる。彼はすっかり嫌気が差してしまふ。

二 第二の洋行

一九二〇（大正九）年五月十六日、成瀬夫婦に長女光子が生まれた。「はじめは光子と命名される筈であったのを、キミというお手伝さんが亡くなったので、縁起をかついで急遽光子に変わったらしい」とは、当の光子（村上）の証言である。日本の文壇に失望した成瀬は、このころから再びフランスへ行くことを考えはじめていた。日本においても意味はない、フランスで勉強したいとの強い思いが彼の胸をよぎる。同年七月十三日、福子の父の川崎芳太郎が死んだ。芳太郎は養子ながらよく川崎家のために働き、川崎造船所発展に尽くした。当時は第一次世界大戦後の好況もあって、川崎家はもとより成瀬正一の父正恭の弟たちまで、造船ブームで莫大の利益を受けていた。

成瀬が再度フランスで学ぶのに、財政的支障はまっ

たくなかった。成瀬家の援助を待つまでもなく、正一夫婦には芳太郎の遺産による川崎造船の株券があった。その配当金だけでも十分だったのである。しかも新興の戦勝国日本の円は強く、大戦前は一フラン三十九銭内外の為替レートが、たちまち二十銭台に、成瀬がのちフランス滞在中の一九二二（大正一一）年には十三銭を割り、以後も円高は続いた。日本の文壇に嫌気が差した成瀬正一は、フランス行きを決意する。

一九二二（大正一〇）年二月、成瀬正一は妻福子を伴い、フランス文学研究の目的でフランスへの旅に立った。イギリスに留学する妹龍子もいっしょだった。成瀬は十二歳年下の龍子をかわいがり、よくその面倒をみた。前年五月十六日に生まれた長女光子は、福子の実家、神戸市布引の川崎家に友成という看護婦付きで預けられた。実家には祖母ちか（千賀）が健在で、面倒をみてくれたのである。それにしても一歳にも満たない子を残し、よくぞ夫婦して渡仏したものである。それだけ成瀬は日本の文壇に見切りをつけ、フランス行きに賭けていたと言っべきか。

長い海路を通り、三月二十四日成瀬夫妻は、イギリ

スに到着し、龍子をロンドンの聖心ハイスクールに入学させる。ロンドンには二週間ほど滞在し、四月上旬パリに渡り、家探しに没頭、落ち着いた先は「*St. Michel ange*」でパリとしてはまず閑静なところだった。彼は日本の友人松岡譲に、「三年振に踏むだ土地は流石になつかしく感じます。路行く人も、草も木も皆昔と変らないやうな気がします。今丁度新緑の頃でボアやシャンゼリゼエに花がひらゐて所謂シイズンの美を發揮してゐます。サロンもあいてゐます。先日出かけて絵を二枚買ひました。二枚で千七百フラン、即日本の二百五十円位です。日本人の油絵よりは上手で安いんだから面白いぢやありませんか」(一九二一・四・三〇付)と書き送る。「不快きわまる日本の文壇」を去り、パリに來た成瀬は当初漱石の『文学論』や『文学評論』のようなものを、フランス文学研究でやりたいと考えていた。

一九二二年の初夏のパリの街は、活気にあふれていた。第一次世界大戦後のパリには、ロシアや東欧からの亡命者たちや数多くのアメリカ人が住みつき、それらにフラン安、円高のメリットもあって、日本からもか

なりの人々がやってきていた。当初成瀬は前年東大の政治科を出て外交官試験に合格した弟の俊介が、日本大使館に勤務していたこともあって、大使館サロンにしばしば顔を出していたらしい。美人で社交好きの福子の存在は、成瀬の身辺をにぎやかなものにした。彼はフランスを愛し、フランス文学を愛した。生活に慣れると、成瀬は先生を雇って十九世紀フランス文学の研究をはじめた。ユーゴー、シャトオブリアン、ヴィニイ、ラマルチン、ミユッセ、ゴオチエ、フロオベル、バルザック、ゾラ、モウパッサンなどを成瀬は熱心に読み、研究対象とするのであった。

成瀬はパリの数多い文芸サロンにも出入りし、その雰囲気を知り、サロンの役割、それが時代の文学にどのような影響を与えるかを考えるようになる。サロンを牛耳るのは婦人であり、そこは社交の場であると同時に、文学・絵画・彫刻・音楽などの勉強の場であり、情報交換の場であることを成瀬はすぐに悟るようになる。後年成瀬は九州大学法文学部の紀要『文学研究』の第二、三輯に、「十八世紀に於ける文芸サロン」という論文を掲載するが、そのサロン観には、この折り

の体験が生かされている。

成瀬正一のフランス文学者としての研究と蓄積は、主としてこの第二回目のフランス滞在期間になされる。彼のフランス鼻肩は松岡譲宛て便りに、「僕の考では英文学なぞ思想はあつても^ニはなく、乾燥でつまらんものと思ふてゐる。フランス文学はそこへ行くと、本当の^ニで、美しい、文学だと思ふ。物質文明に溺れてゐる西洋に、今フランスのやうなエキキュリアンな芸術国があることは、寧ろ思議な位だと思ふ」(一九二三・一・三〇付)とまで言つに至る。

当初パリの大使館にも出入りしていた成瀬は、しばらくすると日本人には会いたくないこともあつて、漱石に做つたわけでもないだろうが、教師を雇い、家で勉強するようになる。外国で日本人に会うというのは、余程親しい関係の者を除くと嫌なものであることは、多少とも外国で生活すると解るのだが、成瀬も同様の理由で日本人を避けている。それでも二、三の人は親しく交わつている。その一人はのち美術史家として名を成す坂崎坦である。彼は一九二二(大正一〇)年から二年間欧米に留学し、パリでは成瀬とも親しく交

わることになる。互いに文学や美術が好きということから話が合つたのであろう。坂崎は一八八七(明治一〇)年三月十八日の生まれなので、成瀬より五歳年上だつたことになる。坂崎とは印象派の画家モネを、パリ郊外のジヴェルニーに一緒に訪問したこともある。

三 松方コレクション

一九二二(大正一〇)年秋、実業家の松方幸次郎が、パリに来て精力的に絵画を買いに歩き回る。成瀬は松方の絵画収集に協力し、重大な役割を演じるのであつた。すなわち、彼は松方コレクション陰の生みの親として、クローズアップされるのである。だが、冒頭に記したように、国立西洋美術館さえ成瀬正一の協力のもと松方コレクションが形成されたことを、いまや失念している。近年の石田修大『幻の美術館 甦る松方コレクション』⁽¹⁶⁾は、本格的松方コレクション論ながら、どういふわけか成瀬正一の名はどこにもない。つまり、松方コレクションと成瀬正一とのかわり方は、完全に忘れ去られてしまつたのである。

松方コレクションとは、言つまでもなく、実業家の

松方幸次郎が購入した膨大な量の彫刻や絵画をさす。現在その一部が国立西洋美術館にあり、常設展示されていることは周知のことである。そこで、まずは国立西洋美術館館長の高階秀爾の紹介文⁽¹⁷⁾を示そう。

松方コレクションと呼ばれるものは、かつて川崎造船株式会社社長であった故松方幸次郎氏（一八六五—一九五〇）が、第一次世界大戦中から一九二〇年代の初めにかけて、パリやロンドンなどヨーロッパの主要都市で収集した膨大な量の美術品の総称であり、国立西洋美術館創設の核となつたのは、その中の一部である。本来の松方コレクションは、西洋の絵画、彫刻、工芸などの作品数千点からなり、そのほかに、約八千点にのぼる日本の浮世絵版画も含まれていた。この浮世絵コレクションは、幕末から明治にかけて大量に国外に流出した江戸期の優れた版画作品を日本に取り戻すため、一九一九年に松方氏がさるコレクターの収集品を一括購入したもので、現在は東京国立博物館に収められている。しかしながら、西洋美術

作品については、その正確な内容も数量もはっきりとわかつてはいない。それというのも、このコレクションはきわめて数奇な運命を辿つたからである。

もともと松方氏が西洋美術の収集に情熱を傾けるようになったのは、当時日本においては、長い歴史を持つヨーロッパの絵画や彫刻作品を直接目にする機会がほとんどなかったたので、日本の愛好家や若い芸術家のために、西洋美術の精髓を広く一般に公開展示する美術館を創ろうとするのがその動機であった。つまり、自分一人の楽しみのためめというよりも、公共のためという社会貢献の志に支えられた収集活動であった。実際、松方氏は、将来設立されるべきその美術館を「共楽美術館」と名付け、建物の設計を依頼し、敷地の手当も行っていた。そして一九二〇年代には、収集品のかりの部分が日本にもたらされ、何回かにわたつて展覧会も開催されて、大きな反響を呼んだ。しかしながら、その後、一九二七年の金融恐慌に端を発する経済事情の悪化によって松方氏も苦境に

陥入り、美術館建設構想も挫折する結果となり、日本に招来された作品群は散逸する運命となった。だが松方氏は、購入した作品すべてを日本に持ち来たったわけではなかった。パリとロンドンにはなお、購入したまま残されていた作品がかなりあり、やがて第二次大戦を迎えることとなる。ロンドンにあった作品群は、倉庫の火災によって焼失したが、在パリの作品群は、戦争中フランス政府の管理下に置かれ、一九五一年のサンフランシスコ条約の締結によって、一旦フランスの国有財産となった。しかし、松方氏の遺志を実現したいという関係者の熱意に支えられて、日仏両政府が長年にわたって折衝を重ねた結果、フランス政府の好意により、一九五九年一月、若干の作品を除いて、在フランスの作品群がまとめて日本政府に寄贈返還される運びとなった。これらの貴重な作品を収蔵、公開展示するために、国立西洋美術館が設立されたのである。この時寄贈返還されたのは、絵画一九六六、素描八〇点、版画二六六、彫刻六三三の合計三六五点であった。

高階秀爾の右の松方コレクション紹介文は、国立西洋美術館に松方コレクションがいかに入ったかの説明であり、クロード・モネやギュスターブ・モローやクールベーなどが、なぜそこに存在するのかといった、いわゆる松方コレクション形成過程には及んでいない。そこで以下に成瀬正一が松方コレクションにかわり、いかに松方に協力したかに筆を進めたい。

松方幸次郎は一八六五（慶応元）年十二月一日の生まれなので、当時五十五歳、まさに働き盛りの年齢であった。彼のヨーロッパ絵画購入は、一九一六（大正五）年にイギリスに出張したころから始まっていた。一九一八（大正七）年十一月帰国した際には、「松方氏、畑違いの美術品を六百点購入して帰国」（『東京朝日新聞』一九一八・一一・二七）と報じられたほどだ。

成瀬正一が第二の洋行でフランスパリの閑静な住宅地45 rue nichelangeに居を定め、パリ生活にも慣れた一九二一（大正一〇）年秋、松方幸次郎がイギリスからパリに来て、精力的に絵画を買いあさることになる。それに協力したのが成瀬正一なのである。松方幸

次郎は成瀬の妻福子の祖父川崎正蔵が創立した川崎造船所の社長だった（福子の父芳太郎は副社長）。幸次郎は正蔵に見込まれて社長に就任し、カンのいい商法と第一次世界大戦中から戦後にかけての好景気にも恵まれて大儲けをし、自由になる大金を持っていた。その額は六百万円から三千万円と証言者によって大きな開きがあるものの、大金には変わりはない。

彼は美術の専門家ではなかったが、理解があった。日本に優れた美術館を造りたいという夢があった。彼はまずヨーロッパに流失してしまった浮世絵を買い戻すことから始めた。フランスの浮世絵収集家のアンリ・ベベルのものをはじめ、多くのものが松方によって買われ、大正八（一九一九）年五月、日本に運ばれた。それは先に引用した高階秀爾の文章にもあったように、現在東京上野の東京国立博物館に収蔵されている浮世絵コレクションがそうなのである。そして一九二一年のパリでの松方の美術品買い漁りには、成瀬正一を抜きにしては成り立たない。

成瀬正一の松岡譲宛書簡（一九二一・九・五付）の一節には、「此頃松方さんが来て方々絵を買ひに歩い

てゐる。ゴオガン十五六枚、セザンヌ四十八枚、クウルベ十枚を筆頭に沢山買った。矢代君も一緒だ。日本で展覽したら立派なものだらう。世界の大抵の美術館には劣るまい。八百枚以上の名画があるんだから」とある。この時の松方の買い漁りは、パリの画商たちを驚かせるものがあつた。パリでの松方幸次郎は、成瀬正一や矢代幸雄や黒木三次（妻竹子は松方の姪）を手引きに、画商通いをし、しまいにはパリから六十キロほど北のジベルニーに住むモネを訪問、直接その絵を買つまでになる。

矢代幸雄は一八九〇（明治二三）年五月二十五日、横浜の生まれ。のち美術批評家として世界的評価を得る人物である。成瀬より二歳年上で大学は一年先輩だった。大学時代から絵画が好きで、卒業後、東京美術学校の講師になった。大正十（一九二一）年成瀬と相前後してヨーロッパに留学、松方幸次郎の絵画コレクションに成瀬とともに携わることになる。矢代は後年「松方幸次郎⁽¹⁸⁾」という一文を発表しているので、その一部を引用する。

当時、私と共に屢々松方さんについて歩いたのは、私と東大以来親しくしていた成瀬正一であった。成瀬は十五銀行の頭取の息子で、菊池や芥川の仲間であった。彼の当時新婚の奥さんは、川崎造船所の川崎家より来ており、従つて、松方さんはこの新婚の夫婦をバリで子供のように可愛いがり、また成瀬は画が好きなので、松方さんの画商めぐりにはよく私と一緒に歩いて歩き、また二人で松方さんの顔をきかせて方々の蒐集家を訪問して、いろいろ見せてもらつた。それで自然に成瀬は松方さんに画の選択について言うことになつていったが、もともと非常な金持の坊ちゃんで臆面なしであり、殊に、松方さんには何でも言える間柄であつたから、成瀬の意見は松方さんに通りがよく、それで私は屢々松方さんに何か言う時、成瀬に応援を頼んだ。

中学時代から絵を好み、自ら絵筆をとつたこともある成瀬は、五年前ニューヨークやボストン滞在中に多くの西洋絵画を見てもいたので、その鑑識眼は高かつ

た。ニューヨークでは、メトロポリタン美術館をはじめとする当時三つほどあつた大きな美術館を、連日のように見て歩き、ボストンではボストン美術館で浮世絵のコレクションやフランス印象派の絵をかなり見ていた。成瀬の絵画鑑賞眼はアメリカ留学時代に養われたと言えようか。

「私ハココへ来テカラ絵ガ本当ニ分リ出シタヤウニ思フ。偉大ナ作ヲ見テイルト、独リデニワカツテクルモノダト思フ」と彼は日本の松岡譲に送つた絵はがき（一九一六・一〇・二七付）に書く。また「紐育通信」⁽¹⁹⁾では、アメリカの美術館についてふれ、「かう云ふ所を見ると羨ましくなる。私は、日本の方々の寺にある所謂「国宝」を集めて、大きな美術館を作る方が、超弩級の戦闘艦を一艦作るより、ずっと意義もあり価値もあるやうに思ふ」との感想をもらしている。

アメリカの美術館では、シャヴァンヌやエル・グレゴやレンブラントやゴアを見ては、そのレプリカを買い、時には日本の芥川や松岡などの友人に送つていた。一九一六（大正五）年十月四日付、新思潮同人諸兄宛てに出した書簡の一節には、「私は美術館で絵を見る

と益々GoyaやChavannesに感心す。少くsystematischな研究をしてGoya論を著したいとさへ思ふ」と書き付けている。

松下幸次郎はよく言われるように、美術の重要性はわきまえていたものの、絵画や彫刻が十分理解できるとは言えなかった。収集家ではあつても、すぐれた鑑識眼を持つとは言えなかった。また、矢代幸雄も言っているが、松方は英語はよくできたものの、フランス語はあまりうまくなかった。しかも現在でもそうだが、フランス人には英語を使わない人が多い。そこで成瀬は松方の通訳をも受け持つこととなる。右の矢代の文章にもあるように、成瀬夫婦は松方に子どものように可愛がれた。松方は二人を幼い頃から知っていた。一方は若き日からの友人で、仕事上の同志ともいえる成瀬正恭の息子であり、いま一方は自分を見込み、川崎造船所の社長の地位につけた恩人、川崎正蔵の孫娘である。そんな関係もあつて、成瀬は松方幸次郎の仕事に一時期深くかかわることとなる。

当時成瀬とともに松方のお供をして画商まわりをした矢代は、イギリスで松方と知り合い、フランス入り

したのであるが、なにせ今回がはじめての留学であり、英語はともかくフランス語の力においては、成瀬に太刀打ちできなかった。そこで自然松方とのかかわりでは、成瀬に一步先んじられるというふうだった。矢代の回想「松方幸次郎」から、成瀬が二人のギユスタールベを松方に勧めたことにかかわる箇所を引用する。

彼（成瀬）は殊に二人の画家を推賞して已まなかつた。一人はギユスタールベ・モローであり、これは確かに彼の文学趣味から来ていた。モローは稀に見る人格者であり、また優れた美術学校教授であつて、門下からマティスやルオー等多数の天才を出しているが、その作品は文学的内容の非常に勝つたもので、感覚を解放して無邪気に自然美を楽しむという近代画から言えば逆傾向で、思想的に重苦しく、神秘的に悩ましいものであつた。それでルノールなどは之を好まなかつたが、同時に詩人文学者の中にはこの思想の象牙の塔に籠つたよつな高踏的芸術を讚美する熱心家もあつた。

成瀬はパリにいる日本の画家達があまりモローを認めないことに甚だ不満を感じて、自らモローの発見者のような気になつて、頻りに松方さんにすすめてモローの画を捜させたが、モローは生前自分の作品を売ることが好まず、殆んど七千点かという画稿類作品一切を合せて国家に寄付し、現在モロー・コレクションとしてパリに公開されてあるくらいだから、彼の作品は殆んど市場に現われない。それでもモローの作品が多少日本へ来ているのは、成瀬が松方さんの周囲にあつて、モロー、モローと言つていたからかも知れない。

もう一つ成瀬が好きだつたのはクールベールであつた。クールベールは文学的主题芸術に反対して芸術を路傍風景の如き何でもない自然描写の一途に帰した大家で、「リアリズム」という名を堂々と芸術上の旗じるしとした大闘士であるから、謂わば主題芸術と神秘主義の残存の如きモローとは逆方向の画家に相違ないのに、成瀬はどういうわけか、恐らく物をこまかしくしつかり描いてあるところが気に入つていたかと察せられたが、成

瀬はクールベールが大好きで、松方さんと一緒に歩くと、頻りにクールベールを求めるので、しまいは画商の方も承知して、いつ行つても何かよいクールベールを見せてくれるようになった。その中には随分いいクールベールもあつたが、どの程度松方さんが買われたか、よく知らない。しかし日本に割合に多くクールベールの佳品から、以下色々の程度のクールベール風の作品が入つているのは、成瀬と共に歩く松方さんが自然に多くクールベールを買われ、その結果、敏感なるパリの美術市場は日本人のお客とみれば、クールベールを出して見せたためではなからうか。お陰で私はよいクールベールの勉強が出来、松方コレクションにもよい作品が入つているようである。

成瀬がモローを高く買ったのは、芥川龍之介や井川恭などの趣味とも通うものがある。彼らは皆モローを理解していた。いま国立西洋美術館に収蔵されているモローの「牢獄のサロメ」は、松方コレクションの一つであり、成瀬の提言が生かされ、松下幸次郎が購入

したものである。一八七三―七六年頃とされるこの絵への『国立西洋美術館名作展』図録の解説を引いておこう。

ヨルダン川でイエスに洗礼を授けたヨハネは、ユダヤの王ヘロデが兄弟の妻ヘロデヤを娶ったことを非難して牢に繋がれた。王は処刑をためらっていたが、王妃は納まらず、王の誕生日に連れ娘のサロメが舞を披露したのを機に、その褒美としてこの聖者の首を求めさせた。名高いこのヨハネ斬首の逸話は、十九世紀になってサロメ自身にヨハネの首を求める動機があつたと解釈され、サロメは男性を破滅へと導く世紀末のファム・ファタルの代表となっていく。モローもまた、このユダヤ女王自身に、聖なる者を打ち負かさうとする邪悪な女性の力を仮託した画家のひとりである。そのサロメ像は、オスカー・ワイルドを始めとする世紀末の文学や美術に多大な影響をもたらした。一八七〇年頃、モローは洗礼者ヨハネの生涯に基づく複数の場面を連作として構想していたが、

それはやがてサロメの舞踏と聖者の斬首という二つ独立した場面へと収斂していった。牢獄のサロメは、そうしたヨハネ斬首のヴァリアントの一つである。空間を縦に仕切る中央の柱にもたれるようにしてサロメは立っている。うつむいたその視線の先には、これから首が載せられる筈の盆がある。柱の右手には、上へ昇る階段と刑具がレンプラント風の光の中に浮かび上がり、左奥では、今まさにヨハネの首が打ち落とされようとしている。全体の構図は、モローが一八七三年に友人の画家ヴジェーヌ・フロマンタンの娘のために描いた「聖マルグリット」と酷似している。

一方、矢代幸雄が「松方コレクションにもよい作品が入っているようである」というクルーバーは、『国立西洋美術館名作選』に二点（「松方コレクション」と明記されたもの）が載っている。その一つ「もの思いうジブシー女」は、まさに成瀬好みの現実直視のリアリズム作品である。これも『名作選』図録の解説に聞こう。

クールベが描く裸婦は、水浴する女たちにも見られるように、理想化されない武骨な姿態ゆえに公衆の憤激を買ひ、しばしばスキヤンダルを引き起こしたが、着衣の婦人を描いた作品は対象を的確に捉える彼の見事な写実力によって概して好評を博した。本作品はクールベが社会的にも認められ、ますます円熟味を増していった一八六九年の作である。若いジプシー女はあらわな肩の上に豊かに垂れ下がる乱れ髪を片手で無心にもてあそびながらじつともの思いに耽っている。画面いっばいにクローズアップされた女の上半身はクールベの卓越した技量によってほのかな官能性すら感じさせるが、それでいて卑俗な風俗描写に終わらず、静謐な詩情を漂わせている。クールベは生涯にわたり権力に対して攻撃的な姿勢を貫き、また自己顕示欲の強い人物であったが、ここでは、このような女性の忘我の状態に詩情を感じる一面のあったことが示されている。

成瀬はフランス絵画ばかりか、ドイツの絵やスペインの絵にも強い関心を抱いていた。ニューヨークのThe Hispanic Society of Americaという美術館では、ゴヤやベラスケスやエル・グレコなどを見て一日過ごすというようなこともあり、「ゴヤの肖像画もタマラナクイイ」（松岡善讓宛、一九一六・一〇・八付）などという感想を友人に書き送っていた。彼にはかなり高い鑑賞眼が備わっていたのである。ロダンなどの彫刻への関心も高かった

松方幸次郎は成瀬の直言を好んで採用し、成瀬の勧める絵画を購入した。先に引用した松岡讓宛書簡に見られるゴーガンやセザンヌの購入にも成瀬の意見が反映していたことであろう。一方、松方の画商通いに成瀬と同行した矢代の意見は、あまり採用されなかった。矢代は後年そのことを『私の美術遍歴』²⁰で、「青二才の青年にすぎなかった私の意見など、松方さんにはほとんど尊重されず、私はただ口悔しいばかりであった」と述懐している。が、右の本によれば、ゴッホの名作「アルルの寝室」（現在パリのオルセー美術館収蔵）を矢代が画商の店で見つけ、「これはぜひ買ってにおいて下

さい」と血相を変えて懇願したところ、松方はとりあげる素振りも見せなかったのに、後日それは購入されていたという。

松方コレクションの全貌とその形成過程の詳細は、今となつては知るよしもない。国立西洋美術館に所蔵されている松方コレクションは、そのほんの一部に過ぎないというから、全容は大変な量にのぼったことは確かだ。戦前日本に送つたものだけでも千点ををはるかに越え、ロンドンで焼失したものが約六百点とされ、フランスに残された絵画は、約四百点とされている。この二千点を越すとされる松方コレクションのうち、成瀬正一のかかわつたのは、主としてフランス美術品に関してであった。

成瀬が第一回の欧米留学中、特にアメリカのニューヨークやボストンで、大学院の授業もそっちのけにして美術館めぐりをし、数多くの絵画や彫刻に接していたのは、この場合役立った。アメリカの美術館とその附属図書館は、成瀬のアメリカ留学中の大学であった。「美術館へ行く毎に私は、ミレエやレムブラントやロダンの作品の前に立つて、それ等の大芸術家の

力に打たれる」と「紐育より一 亜米利加の文壇 劇場 美術館」⁽²⁾に若き成瀬は書いている。彼はせっせと美術館通いをし、カタログや復刻画も集めていた。

松方幸次郎が一九二一（大正一〇）年のパリで美術品の収集に奔走した時、成瀬の鑑賞眼が生かされる。むろん当時の成瀬は、フランス文学研究というライフワークに取り組んでおり、松方のヨーロッパ絵画や彫刻の収集への協力は、趣味の域を出るものではなかつたろう。事実、矢代によればフランスでの松方は、当時フランス国立近代美術館（リュクサンブール美術館）の館長レオンス・ベネデイトを最高の相談役ないしは指導役に仰いでいたというから、成瀬は単なる協力者にとどまるのかも知れない。しかし、これまた先に引用した矢代の回想にもあつたように、成瀬は松方幸次郎という人物に臆することなく、率直に物言いをした。成瀬の純な高貴な精神は、ロマン・ロランを感動させたように松方を動かし、比較的多くの成瀬推薦作が取り上げられることになった。モローやクールベーの例など、その典型といえよう。

四 クロード・モネとの交流

一九二一、二（大正一〇、一一）年のパリにおける成瀬正一の足跡で落とすことのできないのは、印象派の画家、クロード・モネとの交流である。モネは一八四〇年の生まれなので当時八十歳を越え、パリの北、ジヴェルニー村に晩年の生を送っていた。成瀬が夫人の福子とともにしばしばジヴェルニーのモネの家を訪れたのは、一つにはモネの絵を松方幸次郎が買ったための通訳や代金支払いという仕事があったからである。が、それだけではなく、彼はもともとモネの絵が好きであり、また、ジヴェルニーという土地が気に入ったことや、老画家モネ一族との交流が楽しかったからに他ならない。ジヴェルニー村の自然とモネの住まいについては、矢代幸雄の回想「松方幸次郎」に、次のようにある。

ジヴェルニーはパリから一時間ぐらいかかつて行つた所であつたらうか。モネ一邸近くに来ると、低い丘続きの間に池があり、池畔の村落に古い教会の塔が見えたりして、丁度うづらかな陽が当り、

まるでモネ一の画中の田舎を歩き過ぎるようであつた。やがて庭の広いモネ一邸に着いたが、そこにはモネ一が幾度も描いているのでお馴染みの、大きな睡蓮の池があり、その周囲には大小の柳の木が枝を垂れ、また日本の太鼓橋のような欄干のある木橋が架かつていた。

それから家へ入ると、それは相当広い家で、すべて白い色で塗つてあり、廊下には大きな空から日光が自由に射し込み、外光や空の色や緑樹の影が家の中で流れ込むといったような家であつた。そしてその広い廊下から二階へ登る階段にかけて、壁には一面に日本の浮世絵版画が懸けてあつた。光線の強い所にかけてあるから、色は多く褪色していたようであつたが、日本の浮世絵がそれほど常に家中に懸けてあるのを見ると、モネ一の浮世絵への愛はよほど深いものに相違ない、と今更の如く思つた。そしてまた浮世絵の色調はこの廊下や階段の広い窓からさし込む光線、戸外の緑の多い庭園、暖い陽の色などと実によく調和することを見出し、これならばこそ浮世絵は印象派の画家

のインスピレーションになった筈だ、とこのときぐらい強く感じたことはなかった。それから扉をあけて室に入るのであるが、どの室に入っても、モネの作が一概に懸けてあつた。

モネはセーヌ川の渓谷とエプト川の合流点にあるジヴェルニーという小さな村に、一八八三年春から移り住む。この地が気に入ったのである。東京上野の国立西洋美術館の松方コレクションには、「エプト河の釣人たち」や「舟遊び」などジヴェルニーを舞台とした作品がある。当初は借家だったが、一八九〇年には買取り、三年後にはさらに道を隔てた土地を買って、そこに大きな睡蓮の池を作り、日本風の橋まで架けている。連作「睡蓮」や「日本の橋」は、この庭園風景をモデルに成ったものである。

八十歳を過ぎてもモネは精力的に仕事を進めており、日本の美術や文化を深く愛し、日本人とも交わることを楽しみとじていた。当時モネに接近していた日本人に前述の黒木三次・竹子夫婦がいた。黒木三次は日露戦争で勇名を馳せた第一軍司令官黒木為禎大将の長男

で、後に貴族院議員となっている。彼は一九一八(大正七)年に渡仏し、パリで農業を勉強していたが、絵を好んだ。妻の竹子は松方幸次郎の長兄、巖の長女なので、松方の姪に当たった。竹子もまた絵が好きだったようで、日本鼻唄のモネをしばしばジヴェルニーに訪問し、モネに可愛がられたという。彼女の懇望でモネは四点の絵を譲っている。松方幸次郎は、この黒木夫婦に紹介されて成瀬正一や矢代幸雄を伴いジヴェルニーへ行つたのである。

はじめは松方幸次郎の絵画購入の手助けのため、通訳や購入の相談に乗るといふ役目でモネ邸を訪れた成瀬は、やがてその土地や家やモネ自身の魅力に引かれ、妻福子をも伴いジヴェルニー詣でをするようになる。

松方幸次郎がモネ邸で絵を買つた日のことは、先の矢代の回想「松方幸次郎」にくわしい。矢代はその日松方と同道した人々を「私たち」と記し、各人の名を明かしていないが、成瀬が通訳をかねて加わっていたことは、言うまでもない。矢代の文章を引用しよう。

松方さんはその日のモネー訪問の前に、特にお

酒のよいレストランへ私たちを連れて行つて、そこで一八〇八年のナポレオン印のあるブランデーを一本買つて、これをおみやげに持つて行くとモネーは非常に喜ぶと言つていた。それで松方さんがモネーの家でその壺を出すと、モネーは「ナポレオン、ナポレオン」と大きな叫び声を揚げて、その壺を振り上げ大はしやぎであつた。それからまたモネーの画をよく見て廻つて、松方さんは、あれがいい、これがいい、などと言いながら、モネーにこれだけの画を特に自分のために譲つてくれといつて、大作、合計十八枚を数えたところ、これにはさすがのモネーもびつくりしたよつで、まるで感激して、「お前は私の画をそんなに好きなのか」とたずねた。

それでモネーは自分の家にある画はもともと売りにたくないのだけれども、お前がそんなに言うなら譲ろう、という知己感による感激の光景になつた。

成瀬は二度目の渡仏であり、フランス語の通訳とし

ての腕を松方にも評価されていたことであろう。しかもその情熱的態度や風貌は、モネにも好印象を与えるものがあつた。モネと松方幸次郎の意気投合の背後には、若き成瀬正一が存在があつたのである。石田修大の先に挙げた『幻の美術館 甦る松方コレクション』には、モネと成瀬正一とのかわりなど、まったく記されていない。

「睡蓮」をはじめとするモネの名作が、ここに日本人松方幸次郎の手に入ることになる。坂崎坦の「アイ・ライク・ユー 49年前のモネ先生訪問記⁽²²⁾」には、一九二一（大正一〇）年十二月一日に成瀬夫妻とジベルニーのモネ邸を訪問した記録である。この日の訪問は坂崎の記すところによると、「松方氏の依頼で多額の画料を届ける役目」を成瀬が受けたからとある。恐らくは右の矢代の文章に見られる十八点の絵の購入代金だつたであろう。

午前九時、自動車でパリを出発した三人は、ジヴェルニーの手前二十キロほどの村で、自動車が麦畑に横転するという事故に遭い、予定よりかなり遅れて、四時を過ぎてモネ邸に到着する。坂崎はこの日がモネと

の初対面ではあったが、自動車事故の話題が幸いしたようである。坂崎の文章を引用すると、「短い冬の日が落ちかかるころやっとモネ邸に着いた。先生と先生の妹さんが門まで迎えに出られ（アメリカ人と結婚した令嬢たちは不在）、先刻の自動車事故を聞いて、驚くやら慰めてくれるやら初対面から賑やかなことだった」とある。

成瀬正一とクロード・モネとの交流は、成瀬夫人の福子という潤滑油をも得て、いつそう深まる。育ちのよさもあって、成瀬はものに怖じない面があった。それが前回の渡欧では世界的文豪のロマン・ロランに接近し、その寵愛を受け、そして今また世界的画家クロード・モネとの深い交わりに至るのである。松方幸次郎のモネの絵収集は、成瀬正一が存在抜きには考えられない。

成瀬は中学から大学にかけて絵を描くことを好んだ。絵を描くというのは、当時のエリート中学生や高校生の一般的傾向でもあったのだ。大学三年の夏休みには、かなり打ち込んで絵を描いたらしい。大正四（一九一五）年七月二十九日付で、松岡讓がその郷里から東京

の成瀬に宛てた便りの一節には、「画はどうだい」とその画業に関して問うている箇所がある。が、アメリカに留学し、ニューヨークやボストンの美術館ですぐれた泰西の名画に接するに及び、自分で絵を描くことはやめてしまう。いわゆる眼高手低となってしまったからである。他方、妻の福子は、何度かのジヴェルニ訪問の間に絵筆を持ち、キャンヴァスに向かっていた。彼女はパリではデスバニアに師事して絵を習ったとは、成瀬の次男成瀬不二雄（大和文華館次長を経て、九州産業大学芸術学部教授）の直話である。

ところで、長い間、パリのマルモッタン美術館に展示され、成瀬正一の絵の一つとされてきた「モネの肖像」という絵がある。豊かな白髪を生やしたモネが左手に二、三歳の女の子の手を引いて立っているというポーズの絵である。この「モネの肖像」をめぐるエピソードを紹介しておきたい。

一九八五（昭和六〇）年十月二十八日の『朝日新聞』に、「モネらの傑作／客齋して強奪／パリの美術館」という見出しの下、次のような記事が載った。

フランス印象派を代表する画家モネの作品を多く集めたパリのマルモッタン美術館に二十七日朝、複数の強盗が押し入り、「印象派」の名前のもとになった有名なモネの傑作「印象―日の出」(一八七二年作品)など、ルノアール、モリゾの作品を含む九点を奪って逃走した。「印象―日の出」は値をつけられないといわれており、その他の作品を合わせて被害額は一億フラン(約二十七億円)を越すとみられている。

同日午前十時過ぎブローニーニユの森に近いパリ十六区の同美術館に銃を持った四人以上の強盗が押し入り、ガードマンや入場し始めていた客を銃で脅しながら、壁にかかっていた七点とガラスケースの中の二点を奪い、待たせてあった車で逃走した。犯行時に非常警戒装置はスイッチが入っておらず、警察が連絡を受けたのは犯人グループの逃走後だった。

盗まれたのは、モネの作品が「ツールビルの海岸でのカミーユ・モネと従姉」、「オランダのチューリップ畑」など五点、ルノワールが「浴女たち」

など二点、そのほかモリゾの「舞踏会の少女」、ナルゼの「モネの肖像」が盗まれた。

右の記事の最後に出てくるナルゼの「モネの肖像」が、実は成瀬正一作とされた作品なのである。フランスの各新聞は、この事件を大見出しで報じ、国家的大事件なみの扱いをした。そして転売の無理な名画を盗んだ犯人の目論見がどこにあるのかわからないとし、ラング仏文化相の「犯人側からいかなる脅しがあっても譲歩することはない」という談話まで載った。それにしてモネやルノワールの名画とともに、なぜ成瀬の絵がということ、日本でも俄然この絵画盗難事件が問題になりだした。五年後に絵はすべてコルシカ島の別荘で見つかり、無事マルモッタン美術館に戻り、「モネの肖像」もSeïchi NARUSEと画家名がしっかりと記されたが、当時はNARUSEだけだったので、NARUSEとは誰かが問題にされたのである。

週刊誌『フォーカス』もこの事件を「伝名画強奪事件で注目される日本人―『NARUSE』は『成瀬正一』か?」との見出しで報道した。そして成瀬の娘村上光

子らの証言をもとに、「はたしてNARCUSは本当に成瀬正一、あるいは成瀬夫人なのか、今のところ誰にも分からない」としている。

一九九〇（平成二）年十二月六日の『朝日新聞』は、「モネの名画など盗難の9点ノコルシカにあった！」との見出しで、「印象1日の出」などととも成瀬の「モネの肖像」が、コルシカ島南部のポルト・ベッキオの別荘で見つかったことを報じた。翌日夕刊の同紙は、「日本の収集家が九点の取引きをかぎつけ、捜査当局に通報したことを示唆した」とのフランス国家警察刑事事局長の談話を伝えている。

村上光子（成瀬正一の長女）の『一枚の絵』⁽²³⁾は、このニュースに触発され、「モネの肖像」という一枚の絵にこだわって、パリのモルマッタン美術館やジヴェルニーのモネの家を訪ね、その作者に思いを馳せるエッセーで、読ませるものを持つ。村上光子は「モネの肖像」と対面し、絵が好きだった母福子の描いたものといったんは思う。しかし、長生きした当の母福子が、生前一言もそのことに言及しなかったことから、「あの絵の作者は、やはり父ではなかったか？」との思い

にもとらわれているのである。

成瀬作とされる「モネの肖像」は、『フォーカス』昭和六十（一九八五）年十一月十五日号が白黒ながら一ページ大にこの絵を紹介した。バックはジヴェルニーのモネ邸と思われる。本書巻頭写真のモネの家と似た背景だ。向かって左に階段のあるところなどもそっくりである。ゆったりと構えたモネは、これまた写真のモネに近い。向かって右の女の子は西洋人ではなく、東洋人の子どもといった感じである。とくに目と鼻の印象がそうなのである。成瀬は自分が撮った写真を見ながら、この絵を描いたのだろうか。それとも妻の福子が描いたのだろうか。

村上光子は『一枚の絵』の中で、この絵の中の子どもは、自分ではないかとの疑問にとらわれている。確かにそう考えていいところがある。光子の同じ本には、神戸布引の川崎家に預けた幼児の光子の写真をパリで手にした成瀬が、当時の日記に「日本から光子の写真送つて来る。段々と妻の幼時の顔に似てくるようだ。おお、わが愛する光子よ」と記した一節のあることも伝えている。光子の養育に当たっていた福子の母千賀

（戸籍上はちか）は、日ごとに成長する孫の写真を撮っては、パリにいる娘夫婦に送ったのである。その中には三つの祝いの和服姿、夏の庭でのロンバース姿、頭に稚児髷を載せた大写しの顔などがあつたという。こうした点を踏まえて、光子は「モネの肖像」の中の女の子が東洋人風であることや、その髪形やロンバースと思われる夏の服装をしていることから、日本に残してきた娘への思いが託されていたのではないかとする。納得できる話である。

「モネの肖像」は、モネの次男ミッシェル・モネが一九六六（昭和四一）年に所有していたジヴェルニの館と父親の作品その他を、フランス美術アカデミーに寄贈した折りに、絵の作者を成瀬正一と申告していた。村上光子の『一枚の絵』にも、モルマッタン美術館の副館長が「あれはナルセが描いたものだ」とのミッシェルの証言を伝える場面がある。わたしも『評伝成瀬正一』で、この見解を踏まえ、絵の作者は成瀬正一だとした。何度かのジヴェルニ一訪問で、絵心が刺激されたのではないかと推定したのである。盗難事件後、再びマルモッタン美術館に戻った成瀬正一の

「モネの肖像」には、Seïichi NARUSEと作者名が添えられるようになった。

ところで、成瀬正一の子息成瀬不二雄は、早くからこの絵は母福子が描いたものとの説を懐き、この事件後、マルモッタン美術館に調査に赴いて、作品の裏側に「マダム・ナルセによる」という書き込みを確認することとなる。これによって「モネの肖像」の作者は、正一ではなく、妻の福子の作とされるに至った。

二〇〇三（平成一五）年六月二十日～八月十四日まで、高知県立文学館で行われた美術展「モネと印象派の画家たち パリ・マルモッタン美術館コレクションを中心にして」（のうち全国各地で巡回展実施）に「モネの肖像」も展示され、そこではじめて作者名にFukuko Naruseの名が登場する。展覧会に際して刊行された図録『モネと印象派の画家たち』²⁴には、カラー版の「モネの肖像」の前ページに、次のような説明書きが添えられている。

この作品は仏文学者で九州大学教授であった成瀬正一（1892-1936）に帰属するものとされてき

たが、成瀬に油彩画を学んでいたという事実はなく、夫人の福子の筆になるものと思われる。この作品はモネの次男ミシエル・モネからマルモッタン美術館に寄贈されたもの一つだが、彼はこの作品について「ナルセが描いた」としか言及しておらず、成瀬夫婦のいずれかが描いたかは特定されていなかったのである。

そもそもこの作品が世に知られることになったのは、一九八五年の有名な「印象・日の出 盗難事件」の際、強奪された重要な作品の中に、なぜかこの無名の日本人画家の作品が含まれていたことによる。強奪された作品九点は一九九〇年にコルシカで発見され、犯人も逮捕されたが、この事件を契機に成瀬の遺族が調査を行い、この作品の裏側に「マダム・ナルセによる」と書き込みが確認されている。ただしこれは福子自身が書いたものではなく、マルモッタン美術館の特定できない館員によるものとのこと。

モネと手をつなぐ少女は成瀬夫婦の長女、光子である。成瀬正一は生後間もない光子を日本に残

し、夫人を伴ってフランスに留学していたが、コレクター松方幸次郎の通訳を務めた関係でモネ家に親しく出入りしていた。福子は日本から送られた光子の写真をもとにこの作品を描いたのである。

「作品の裏側に マダム・ナルセによる」と書き込みが確認されている。ただしこれは福子自身が書いたものではなく、マルモッタン美術館の特定できない館員によるものとのこと」という慎重な言い回しはしているものの、「モネの肖像」が、成瀬福子であることを確定した一文である。

*

成瀬正一はパリ滞在中、十八、九世紀のフランス文学を、家庭教師を雇い、せっせと研究するようになる。彼は漱石の『文学論』や『文学評論』のようなものを、フランス文学について著したいと思ひ、勉強を開始したのである。パリ滞在最初の年は、松方幸次郎の美術コレクションへの協力という仕事もあつて、落ち着いて勉強できなかったものの、翌年一九二二（大正一一）年からは、本格的に腰をすえて研究に励むようになる。

仏文学者としての成瀬正一の学問的素養は、この時期に養われる。

むろん時々にはヨーロッパの各国への旅もしている。しばらく音信を絶つてしまったロマン・ロランのいるスイスにも行き、無沙汰を謝している。松岡譲の「若き日『新思潮』時代の思ひ出」⁽²⁵⁾は、そのことにふれて「二度目の渡仏の折もわざわざ先生をジュネーブの湖畔にお訪ねして、そのつけた温情感化もなみくならないものがあつたやうだ。其時先生から貰らつて来たサイン入りの短い原稿が、今私の手元に保存されて居る」と書いている。

一九二五(大正一四)年二月、足掛け五年のパリ生活を終え、成瀬正一は帰国する。そして同年十月一日付で九州帝国大学法文学部講師となり、翌年五月、教授に昇格する。フランス文学研究者としての成瀬正一に関しては、別稿に譲りたい。

注

(1) 『国立西洋美術館名作選』第三刷、国立西洋美術館学芸課、二〇〇四年一月三〇日

(2) 大阪市立大学大学史資料室編『向陵記 恒藤恭一高時代の日記』大阪市立大学、二〇〇三年三月三十一日

(3) 『森田浩一とその時代』日記を通して見えてくるもの』福生市郷土資料室、二〇〇一年一月二五日

(4) 長崎太郎「妻と娘と女中」NHKラジオ高知放送局、一九六〇年放送原稿

(5) 成瀬福子の写真 小著『評伝成瀬正一』日本エディタースクール出版部、一九九四年八月一八日、巻頭口絵に収録

(6) 村上光子『わが父わが母』パソブック、一九八五年四月一日

(7) 「一種の政略結婚」成瀬不二雄の直話による

(8) 関口安義『評伝成瀬正一』日本エディタースクール出版部、一九九四年八月一八日

(9) 江口渙『新思潮』勃興時代のこと』文章倶楽部』一九二六年九月一日

(10) 成瀬正一の帰朝祝賀会 一九一九年一月二一日夜、日本橋の末広本店で催された。

(11) 芥川龍之介「陰影に富んだ性格 江口渙氏の印象」『新潮』一九一九年二月一日

(12) 佐藤春夫「犬属の性情の人物 江口渙氏の印象」『新潮』

- 一九一九年一月一日
- (13) 芥川龍之介「我鬼屋日録」より「サンエス」一九二〇年三月一日
- (14) 村上光子「一枚の絵」私家本、一九九一年一〇月
- (15) 成瀬正一「十八世紀に於ける文芸サロン」九州大学法文学部紀要『文学研究』第二、三輯、一九三二年一〇月三〇日、一九三三年一月二五日
- (16) 石田修大『幻の美術館 甦る松方コレクション』丸善ライブラリー一七九、一九九五年二月二〇日
- (17) 注(1)に同じ
- (18) 矢代幸雄「松方幸次郎」『藝術新潮』一九五五年一月一日、のち『藝術のパトロン』新潮社、一九五八年一〇月五日収録
- (19) 成瀬正一「紐育通信」第四次『新思潮』一九一七年一月一日
- (20) 矢代幸雄『私の美術遍歴』岩波書店、一九七二年九月二八日
- (21) 成瀬正一「紐育より一 亜米利加の文壇―劇場―美術館」『新思潮』、一九一六年一月一日
- (22) 坂崎坦「アイ・ライク・ユー 49年前のモネ先生訪問記」『フランス印象派百年記念 モネ名作展』図録、一九七〇年十月
- (23) 注14に同じ
- (24) 『モネと印象派の画家たち』中日新聞社、二〇〇三年六月一〇日
- (25) 松岡譲「若き日 『新思潮』時代の思ひ出」『文学クラブ』一九四九年二月二〇日